Book Review 21－2　家族　＃細雪

『＃細雪（上）（中）（下）』（谷崎潤一郎著）を大活字本で読んでみた。最近はときどき大活字になった名作を読むことにしている。

著者は、明治から昭和まで戦中・戦後の一時期を除き終生旺盛な執筆活動を続け、国内外でその作品の芸術性が高い評価を得た。文化勲章受章。初期は耽美派と言われスキャンダラスな文体であった。その作風や題材、文体・表現は生涯にわたって様々に変遷した。作品ごとにがらりと変わる巧みな語り口が特徴。

舞台は 1936 年から 1941 年までの太平洋戦争前の大阪船場。1943 年から 2 回にわたり「中央公論」に掲載されたが、軍部から「内容が戦時にそぐわない」として掲載を止められている。終戦後に作品を完成させたが、GHQ の検閲で一部の改変を余儀なくされた（こちらは戦意高揚が理由）。読む立場によって、評価が変わる。

作品は古いのれんを誇る蒔岡家の四人姉妹、鶴子、幸子、雪子、妙子が織りなす人間模様が描かれる。昭和十年代（戦前）の関西の上流社会の生活のありさまを四季折々に描き込んだ絢爛たる小説絵巻となっている。話は 30 歳を過ぎて独身の三女雪子の縁談の話を中心に進行する。縁談がまとまりかけると障害が発生し破談を繰り返す。現在では廃れてしまったが、本家と分家の折り合いも重要要素だ。大切なことは手紙で連絡し合う文化が残っている。女性は適齢期を過ぎるとお節介な隣人たちが持ち寄る見合いで結婚しなければいけないのか？（必ず興信所で人物調査をする）。自分で探す気がないなら結婚しなくてもいいのではないかと思ってしまうのだが・・・。一方、四女は奔放に生きており、それが三女の縁談に影を投げかける。今度の縁談はどうなるのかとついついページを捲ってしまう。

四季の催し（花見、歌舞伎観劇、音楽鑑賞）に家族ぐるみで必ず参加している。一昔前は家族で文化を堪能していたのがよくわかる。近所に住む外国人との付き合い方も興味深い。

医者的な興味であるが、この頃の病気のときの受診の仕方を知ることができ興味深い。まず体調を崩すとかかりつけ医（個人的な付き合いもある）に受診するか、往診を依頼するする。そして自宅で治療を受ける。それで、はかばかしくないと大学病院を紹介受診してもらうというパターンである（その頃の金持ち

のかかり方かもしれないが)。

　このような些細な日常の描写が後々重要な歴史資料になるのかもしれないと思いながら読み進めた。